四時の宴 ―建安の公宴詩について―

趙　美子

はじめに

「公宴」[1]というのは、王公貴族が催して臣下を招く宴会である。[2]そのような宴会で詠じられた詩やその宴会の場面を描いた詩は、まとめて公宴詩と呼ばれる。建安年間の公宴といえば、凡そ当時の実質的最高権力者である曹操や、その嫡男の曹丕が主催した宴会をいう。後漢末の建安年間（一九六～二二〇）において、曹丕・曹植兄弟といわゆる「鄴下文人集団」、即ち建安の七子のうち、孔融を除いた陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・應瑒・劉楨の六人を中心とした文人たちの間で、文学的交際が盛んに行われており、宴会や遊覧の場で詩賦を作ることもその一環である。曹丕・曹植と以上の六人の中で、徐幹を除いてみな公宴詩の作品を残している。[3]ゆえに、彼らの公宴詩は当時の集団創作の情況を研究する上で極めて重要な材料であると言える。

現存する建安の公宴詩の中には、同じく「公宴」や「宴会」をタイトルにした作品が何首もあるが、先行研究ではみな同時期の作品として扱われる場合がある。しかし、これらの詩を時節や景物、そして宴会の場面の描写から考察すれば、必ずしも同時期の作品とは限らないと考えられる。本稿では、建安年間の五言公宴詩の中からその背景や時期が推測できるような作品を幾つか挙げて、春・夏・秋・冬の四つのグループに分けて検討しながら、詩のモデルとテキストについてもいささか論じたいと考える。

一、春の宴

春の宴会を描写している公宴詩は、阮瑀の「公讌詩」と曹丕の「孟津詩」である。ただ二首の間に関連性があるとは判断し難いので、異なる場面で作られたと考えられる。

まずは阮瑀の「公讌詩」を見てみよう。

陽春和氣動　賢主以崇仁　　陽春に和気動き　賢主　以て仁を崇(あが)む
布惠綏人物　降愛常所親　　恵を布(し)きて人物を綏(やす)んじ　愛を常に親しき所に降す
上堂相娛樂　中外奉時珍　　堂に上がりて相い娛楽し　中外より時珍を奉る
五味風雨集　杯酌若浮雲(4)　　五味　風雨のごとく集まり　杯酌　浮雲の若し

この詩は前半と後半に分けられる。前半の四句は宴会の背景を表し、詩全体の下地を用意している。「陽春和氣動、賢主以崇仁」二句は季節を明らかにしながら、宴会の主催者への賛美も表している。暖かく和やかな春の日に、賢明な主君は仁徳あふれる政治を施行している。「陽春」という語は、自然的環境のほかに政治的環境も表しているように感じられる。次の「布惠綏人物、降愛常所親」二句は続いて主人を褒め称え、さらに宴会に至る経緯、或いは宴会の目的に触れている。主君はその恩恵をあまねく臣民や万物に及ぼして、更に日頃から親しい配下に手厚いもてなしを賜るため、宴会を催した。

後半の「上堂相娛樂」からの四句は宴会の場面の描写に移り、特に飲食の描写に集中している。賓客は大広間に登って宴会を楽しみ、天下の珍しいものがここに献上されている。様々な肴は風雨のようにたくさん集まり、杯は漂う雲のように盛んに酌み交わされている。詩のテキストはここで終わるが、後述の公宴詩を見れば分かるように、詩の最

後によくある宴会に対する総括的な内容がこのテキストにはないので、不完全なものであると思われる。

詩の中の「賢主」、即ち宴会の主催者は曹操であると理解した方が相応しいと考える。阮瑀は建安初年から曹操に仕え[4]、建安十七年（二一二）に亡くなったので、どちらでも建安文人の中では相当早いほうである。さらに宴会の場面はみな大同小異なところもあるが、特に「陽春」の時節から見れば、この詩と同じ時期の宴会を描写しているほかの詩は見つからない。もし全部散佚したのではなければ、恐らく当時には、後に宴会の中心となる曹丕がまだ若かったので、公宴詩の創作もまだ盛んに行われていなかったのであろう。したがって、具体的な時期は断定し難いが、この詩は現存する建安公宴詩の中で比較的早期の作品であろうと推測する。

一方、曹丕の「孟津詩」に上述とは別の宴会の場面が見える。

良辰啓初節　高會構歡娛　良辰　初節を啓き　高会して歓娛を構う
通天拂景雲　俯臨四達衢　天に通じて景雲を払い　俯して四達の衢に臨む
羽爵浮象樽　珍膳盈豆區　羽爵　象樽に浮ぎ　珍膳　豆区に盈つ
清歌發妙曲　樂正奏笙竽　清歌　妙曲を発し　楽正　笙竽を奏す
曜靈忽西邁　炎燭繼望舒　曜霊　忽として西に邁き　炎燭　望舒に継ぐ
翊日浮黃河　長驅旋鄴都　翊日　黄河に浮き　長駆して鄴都に旋らん

建安二十年（二一五）三月、曹操が漢中の張魯を討伐し、翌年二月に鄴に戻った[5]。その間に曹丕は黄河の南にある孟津に駐在していた[6]。首句の「初節」には元日の意味があるので、この詩は恐らく建安二十一年（二一六）の元日に孟津で開かれた宴会を描いているのであろう。

最初の四句は宴会の背景である。「良辰啓初節、高會構歡娛」二句は宴会が開催された時間と目的を表している。

めでたい時節に元日を迎えるため、みな一堂に会し宴を楽しむ。「通天拂景雲、俯臨四達衢」二句は宴会場の外部環境を描写している。空を仰いで瑞雲に触れるように高く、俯いて四方八方に通じている大通りを見下ろす。この描写は前の二句の「良辰」と「高會」にも対応しており、めでたい気分をいっそうかき立てている。

次の四句ではまた目を外から室内に移し、宴会の場面を描写している。「羽爵浮象樽、珍膳盈豆區」二句は宴会の飲食を描写している。「羽爵」、即ち羽觴は当時流行した楕円形の杯であり、両側に鳥の翼のような取っ手があるので名付けられた。「象樽」は象の形をしている大きな青銅の酒器であり、主に殷周時代の祭祀に使われていた。「豆・區」はともに食器の類である。杯は古えの象樽よりも大きく、珍しい肴は器に満ち溢れている。続いて「清歌發妙曲、樂正奏笙竽」二句は宴会を飾る音楽を描写している。歌い手は美しい調べを歌い、楽師は様々の楽器を演奏している。このような音楽の描写は前述の阮瑀の「公讌詩」には見られないが、実際にはほかの建安公宴詩によく見られる要素である。

次の「曜靈忽西邁、炎燭繼望舒」二句は宴会が夜まで続くことを表している。いつの間にか日（「曜靈」）が西に沈み、月（「望舒」）が昇るとろうそくを燃やして明かりをつける。宴会の終わりは描かれていないが、宴会が終わろうとする動きが感じられる。最後の「翊日浮黃河、長驅旋鄴都」二句は作者自らの願いを詠っている。これから黄河を渡り、馬を馳せて鄴に帰ろう。「翊日」とは明日の意味であるが、後日や将来を表すのも可能である。昨年十一月に張魯が投降したので[7]、このとき勝利の吉報はすでに曹丕のところまで届いているはずであり、それは正月の宴会の喜ばしい雰囲気をより一層益している。曹丕が凱旋の場面を想像しながら、希望に満ちた結句を詩にもたらしているのも、そのゆえであろう。

まずは宴会の背景（時間・原因・環境など）から詠い始め、続いて宴会の場面（飲食・音楽など）を描写し、最後には総括的な内容を加え、多くは宴会に対する自らの願望や感想（或いは宴会の主催者に対する感謝や称賛）をうたい上げる。この詩に見られる以上のようなモデルは、後述の詩にもよく見られるので、建安公宴詩の一般的モデルであると言える。

二、夏の宴

夏の宴会を描写している公宴詩には、曹丕の「夏日詩」・曹植の「侍太子坐詩」・王粲の「公讌詩」・陳琳の「宴會詩」があり、みな同じ時期の作品であると考えられる。

まずは曹丕の「夏日詩」と曹植の「侍太子坐詩」を比べて見てみよう。

曹丕「夏日詩」

夏時饒温和　避暑就清涼　　夏の時　温和なるに饒(と)む　暑を避けて清涼に就く
比坐高閣下　延賓作名倡　　比(ならぶ)びて坐る高閣の下　賓を延(まね)きて名倡を作(うこ)かしむ
絃歌隨風厲　吐羽含徵商　　絃歌　風に随いて厲(はげ)しく　羽(う)を吐き徵商を含む
嘉餚重疊来　珍果在一傍　　嘉餚　重畳して来り　珍果　一傍に在り
棊局縱横陳　博弈合雙揚　　棊局　縱横に陳(なら)び　博弈　合して双つながら揚ぐ
巧拙更勝負　歡美樂人腸　　巧拙　更ごも勝ち負けし　歡美なるは人の腸(こころ)を楽しましむ
從朝至日夕　安知夏節長　　朝より日夕に至る　安くんぞ夏節の長きを知らん

この詩は建安公宴詩の一般的モデルに従っているが、また独特なところもある。最初の四句は宴会の背景である時期・原因・場所を表している。蒸し暑い夏の季節に、暑さを避けるため涼しい場所に移る。高閣の下にみな相近づいて座り、賓客を招いて有名な歌い手を招聘する。続いて「絃歌隨風厲」からの四句は宴会の一般的な場面を描写している。楽曲と歌声は風に漂い、五音から美しいメロディーが成される。よい肴は次から次へと運ばれてきており、珍しい果物もすぐ傍にある。また最後の「從朝至日夕、安知夏節長」二句も単純に宴会の楽しい気分を詠っている。朝

から夕べまでも宴会を楽しんでいれば、夏の日の長さも忘れるであろう。

注目すべきは「棊局縱横陳」からの四句である。碁盤はどこにでも置かれており、六博や囲碁などの対局が同時に行われている。互いに勝ち負けを競い、みな心から楽しんでいる。飲食・音楽などの場面とは異なり、このような遊戯の場面は、ほかの建安公宴詩にはほとんど見られないので、独特な表現要素であると言えよう。この四句は、この詩と次の詩との関連性を探るための重要な手掛かりとなる。

曹植「侍太子坐詩」

白日曜青春　時雨靜飛塵　　白日　青春に曜(かがや)き　時雨　飛塵を静む
寒冰辟炎景　涼風飄我身　　寒冰　炎景を辟(しりぞ)け　涼風　我が身に飄(ひるがえ)る
清醴盈金觴　肴饌縱横陳　　清醴　金觴に盈れ　肴饌　縱横に陳(なら)ぶ
齊人進奇樂　歌者出西秦　　斉人　奇楽を進め　歌者　西秦より出ず
翩翩我公子　機巧忽若神　　翩翩たる我が公子　機巧　忽として神の若し

この詩について、まずは「白日曜青春」には文字の異同があり、『太平御覧』巻五三九のテキストは「春」を「天」に作る。逯欽立氏や趙幼文氏はともに意味として「天」に作るほうが正しいと指摘している。[8] 実際には押韻からこの結論も証明できる。建安の詩では、まだ上古音で押韻する場合が多い。この詩の第二句からの押韻字は「塵・身・陳・秦・神」であり、みな上古から中古にかけて真韻に属している。もし第一句の押韻字が「春」に作るなら、中古音で諄韻に属し真韻とは同用であるが、上古音では文韻に属している。一方、「天」は中古音では先韻に入ったが、上古音ではまだ「塵」などと同じ真韻に属している。[9] ゆえに、「天」に作る方がただ意味がより通じるだけではなく、押韻もより整う。「春」に作るのは、もしかしたら後世の人が中古音の押韻規則に合わせるため原文を改めたのかもしれない。

曹植のこの詩を曹丕の「夏日詩」と比べてみると、この詩にも同じ宴会が描かれているのではないかと思われる。特に前の八句では、夏の天気や宴会の場面の描写は「夏日詩」に非常に合致している。太陽が青空に輝き、時雨が空気中に漂う塵をしずめた。氷をもって熱さをしりぞけ、涼しい風がわが身に吹いている。清い酒は黄金の杯に溢れ、肴は気ままに置かれている。東の斉の人はめずらかな音楽を演奏し、歌い手は西の秦より来る。ただ、宴会の背景にあたる最初の四句では、曹丕の詩は季節や天気のほかにも、宴会の場所（「高閣」）と宴会の開始（「延賓作名倡」）を表しているのに対して、曹植の詩は当時の天気や避暑の手段をより詳しく描写しているが、宴会の場所と開始を提示せず、そのあとは直接飲食や音楽の場面の描写に移っている。そして、「夏日詩」に見られる対局の場面も、この詩にはないようである。

しかし、川合康三氏が述べているとおり、この詩の現存するテキストは「どこか不完全な印象を与える作品」[10]である。確かに最後の「翩翩我公子、機巧忽若神」二句は主人を称揚する一般的な結句として扱われがちであるが、実際のところはそう簡単ではないと思われる。公宴詩では最後に主人を褒め称える場合が多いが、「機巧」はもともと人に対する褒め言葉ではなく、「機械の巧み」から、転じて「悪賢い」という意味を表す。例えば、『荘子』外篇「天地」には「功利機巧、必忘夫人之心」とあり、六朝に至ると梁の江淹「雑體詩效張綽」にも「亹亹玄思清、胸中去機巧」とある。これらの用例から見れば、「機巧」は人の心の中にあるべきものではないと認識されている。ただし、『後漢書』張衡伝には「衡善機巧、尤致思于天文、陰陽、暦筭」とあるので、技術面においては「機巧」は「機械の巧み」のまま、逆に褒め言葉に変わる。ゆえに、この詩の中の「機巧」は曹丕の人柄に対する評価ではなく、何かの技術に対する称賛であるように考えられる。また「機巧忽若神」について、趙氏は注釈に曹丕『典論』自叙と張華『博物志』に述べられた曹丕が弾棋に堪能であったという内容を引用している。[11] この注釈はまさに「機巧」が弾棋の技術を指して言うことを示唆しているようである。もしそうであれば、前の八句に見られる対応関係と同じように、この二句も「夏日詩」の「棊局縱横陳」の四句に対応しているはずである。つまり、曹丕は対局の場面を描いており、曹植は曹丕の巧

みな技を褒め称えている。さらに、「機巧忽若神」の後ろには恐らく対局の場面についての具体的な描写があり、最後には詩全体を総括する結句もあるはずであろうと推測する。

ちなみに、題名には「太子」という呼び名が用いられているが、詩の中には「公子」とあるのは、この詩は曹丕が太子になる前に作られた作品であるということである。

次に王粲の「公讌詩」を見てみよう。

昊天降豐澤　百卉挺葳蕤　昊天　豊沢を降し　百卉　葳蕤たるを挺ず
涼風撤蒸暑　清雲却炎暉　涼風　蒸暑を撤り　清雲　炎暉を却く
高會君子堂　竝坐蔭華榱　高会す　君子の堂　並び坐して華榱に蔭わる
嘉肴充圓方　旨酒盈金罍　嘉肴　円方に充ち　旨酒　金罍に盈つ
管絃發徽音　曲度清且悲　管絃　徽音を発し　曲度　清くして且つ悲し
合坐同所樂　但愬杯行遲　合坐　楽しむ所を同にし　但だ愬う　杯の行ることの遲きを
常聞詩人語　不醉且無歸　常て詩人の語を聞く　醉わざれば且く帰ること無かれと
今日不極懽　含情欲待誰　今日　懽しみを極めずして　情を含みて誰をか待たんと欲す
見眷良不翅　守分豈能違　眷みらるること良に翅ならず　分を守りて豈に能く違わんや
古人有遺言　君子福所綏　古人に遺言有り　君子は福の綏んずる所と
願我賢主人　與天亨巍巍　願わくは我が賢主人　天と与に巍巍たるを亨けよ
克符周公業　奕世不可追　克く周公の業に符い　世を奕ぬるも追うべからざらんことを

前述の詩がすべて類書に引かれたものであるのに対して、この詩は『文選』巻二〇公讌に収録されているので、テ

キストはより一層信憑できる。詩は前半の十二句と後半の十二句に分けられる。前半は宴会の背景と場面を描写しており、後半は詩人の感想や主人に対する感謝と祝福を表している。建安公宴詩の一般的モデルに従ってはいるが、ただ感想などの部分は詩の半分も占めており、ほかの詩より随分長い。

最初の十句は、前述した曹丕と曹植の詩にもよく合致している。直接季節を表すのは「昊天」という言葉である。『爾雅』釋天によれば、「春爲蒼天、夏爲昊天、秋爲旻天、冬爲上天」とあり、「昊天」は特に夏の空を指していう。この詩は、王粲は「主人」の配下であり客人でもあったことから、描写には「主人」に対する称揚の意思が目立っている。例えば、「昊天降豐澤、百卉挺葳蕤」の二句は単なる季節の描写だけではなく、君主（ここでは曹操を指す）が浩大な恩沢をあまねく施し、世間万物はそれによって栄えているという意味も含まれている。また「君子堂」や「華榱（彫刻を飾る垂木）」の言い方も「主人」に対する称揚である。さらに注目すべきは、前半の最後にある「合坐同所樂、但愬杯行遲」の二句である。宴会に参加した賓客はみな楽しんでおり、ただ杯が回ってくるのは遅いと苦情を言っている。この二句は詩の前半、特に宴会の場面の描写に対する結びである。このような前半と後半を同じ句数に分けてそれぞれに結びをつける結構は、意識的なものだと思われる。

詩の中の「賢主人」、即ち宴会の主催者は、『文選』李善注では曹操であると述べられているが[12]、曹丕を指している可能性もあると考えられる。特に「克符周公業、奕世不可追」二句は、曹丕を周公に喩えていると考えるのは、曹植の「娛賓賦」には「欣公子之高義兮、德芬芳其若蘭。揚仁恩於白屋兮、逾周公之棄餐」とあり、これは明らかに周公の典故を用いて曹丕を褒め称えているからである。ただ、もし曹丕が周公であれば、曹操は周の文王でなければならないであろう。ゆえに、この曹丕を称揚する言い方からは、当時の曹操の爵位がすでに王に達していることを窺わせる。

この推測を証明するために、次に陳琳の「宴會詩」を見てみよう。

凱風飄陰雲　白日揚素暉　　凱風　陰雲を飄（ひるがえ）し　白日　素暉を揚ぐ

良友招我遊　高會宴中闈　　良友　我を招きて遊び　高会して中闈に宴す
玄鶴浮清泉　綺樹煥青蕤　　玄鶴　清泉に浮き　綺樹　青蕤を煥かす

この詩は『芸文類聚』巻三九に収録されており、また不完全な作品ではあるが、ただ六句だけの中には重要な情報が含まれている。最初の二句に描かれた季節や天気も前の三首に合致している。「凱風」は即ち南風、特に夏の風を指している。第三句の「良友」というのも曹丕を指している。これを説明するために、ここでは少し七子と三曹の関係について説明しておく。ひとまとめにして「建安七子」と言えども、彼らの間に身分や立場の違いがある。七子の中で、孔融だけが曹操の同僚であり、曹氏の配下になったことがない。ほかの六人はすべて曹氏の配下ではあるが、陳琳・阮瑀・王粲は終始曹操に仕えており、それに対して徐幹・應瑒・劉楨はのちにそれぞれ曹丕と曹植の直属の家臣になった。また年齢から見れば、孔融だけは曹操より年上である。陳琳と阮瑀の年は曹操に近く、曹丕・曹植兄弟にとっても相当な年配者である。王粲・徐幹・應瑒・劉楨も曹丕より平均十歳ほど年上ではあるが、比較的に若いほうである。ゆえに、年配者であり、しかも曹操に仕えている陳琳にとっては、主君の息子である曹丕はそれほど目上の人ではないのも道理である。

特に注目すべきは、第四句の「中闈」という言葉である。「中闈」とは宮中の意味であり、[13] ここでは曹丕が宴会を開いた場所を指して言う。曹氏一族の屋敷を宮殿として詠うのは、少なくとも曹操が魏公になった建安十八年[14]（二一三）以降のことであり、さらには魏王になった建安二十一年[15]（二一六）以降のことであると思われる。

さらに、それぞれ「大暑賦」と「槐賦」と題する一連の同題の作品があり、以上の四首の詩とごく類似した猛暑の天気を反映している。先行研究の考証によれば、これらの賦はともに建安二十一年夏の作品であり、特に「大暑賦」は「大暑」の節気の頃、つまり六月に作られたとされている。[16] 現存している作品から見れば、本章で触れた作者の中では、「槐賦」を書いたのは曹丕・曹植・王粲であり、「大暑賦」を書いたのは曹植・王粲・陳琳である。この状

況はこれらの詩と賦の関連性をより一層高めている。ゆえに、以上の四首の詩は「大暑賦」や「槐賦」と同じく建安二十一年の夏に作られたと推測する。

三、秋の宴

この秋のグループには、公宴詩といえども遊覧の場面を描いている作品が多い。例えば曹丕の「芙蓉池作」や曹植の「公讌詩」、劉楨の「公讌詩」であり、みな同じ宴遊の場面を表現していると判断できる。また應瑒の「侍五官中郎將建章臺集詩」も、類似した表現によって前の三首との関わりがあると考えられる。また、このグループの詩はすべて『文選』に収録されている。

まずは最も有名な二首である曹丕の「芙蓉池作」と曹植の「公讌詩」から見てみよう。

曹丕「芙蓉池作」

乘輦夜行遊　逍遙步西園　　輦に乗りて夜に行遊し　逍遥して西園に歩む
雙渠相漑灌　嘉木繞通川　　双渠　相い漑灌し　嘉木　通川を繞る
卑枝拂羽蓋　脩條摩蒼天　　卑枝　羽蓋を払い　脩条　蒼天を摩す
驚風扶輪轂　飛鳥翔我前　　驚風　輪轂を扶け　飛鳥　我が前に翔る
丹霞夾明月　華星出雲閒　　丹霞　明月を夾み　華星　雲間より出ず
上天垂光采　五色一何鮮　　上天　光采を垂れ　五色　一に何ぞ鮮やかなる
壽命非松喬　誰能得神仙　　寿命　松喬に非ざれば　誰か能く神仙を得ん
遨遊快心意　保己終百年　　遨遊して心意を快くし　己れを保ちて百年を終えん

曹植「公讌詩」

公子敬愛客　終宴不知疲　公子　客を敬愛し　宴を終うるまで疲るるを知らず
清夜遊西園　飛蓋相追隨　清夜に西園に遊び　飛蓋　相い追随す
明月澄清影　列宿正參差　明月　清景を澄ませ　列宿　正に参差たり
秋蘭被長坂　朱華冒綠池　秋蘭　長坂を被い　朱華　緑池を冒う
潛魚躍清波　好鳥鳴高枝　潛魚　清波に躍り　好鳥　高枝に鳴く
神飆接丹轂　輕輦隨風移　神飆　丹轂に接し　軽輦　風に随いて移る
飄颻放志意　千秋長若斯　飄颻として志意を放にし　千秋　長に斯くの若くあらん

『文選』はこの二首の詩をそれぞれ「遊覧」と「公讌」の分類に収録しているが、内容から見ればともに遊覧の場面を描写している。それにもかかわらず、これらの詩もほぼ建安公宴詩の一般的モデルに従っており、ただ描写の重心は宴会の場面から遊覧の場面、特に自然の景物に変わる。多くの先行研究ではすでに以上の二首が唱和の作品であると述べられており、[17] ほぼ通説になったと言える。ところが、何故であろうか。この二首の詩には季節の表現があまりにも少ない。ただ曹植「公讌詩」の「秋蘭被長坂、朱華冒綠池」二句が秋の季節を言明しており、詩の創作時期を判断する手掛かりを提供している。趙幼文氏は『曹植集校注』を編纂する時、従来の建安十六年説に反論し、この詩を建安十七年の作と見なしている。[18] この意見は重視すべきであると考える。

劉楨の「公讌詩」にも、以上の二首と同じ場面が描かれていると見出せる。

永日行遊戲　懽樂猶未央　永日　行きて遊戯するも　懽楽　猶お未だ央きず
遺思在玄夜　相與復翺翔　遺思　玄夜に在り　相い与に復た翺翔す

輦車飛素蓋　從者盈路傍　　輦車　素蓋を飛ばし　從者　路傍に盈つ
月出照園中　珍木鬱蒼蒼　　月出でて園中を照らし　珍木　鬱として蒼蒼たり
清川過石渠　流波爲魚防　　清川　石渠を過ぎ　流波　魚防を為す
芙蓉散其華　菡萏溢金塘　　芙蓉　其の華を散らし　菡萏　金塘に溢る
靈鳥宿水裔　仁獸遊飛梁　　靈鳥　水裔に宿り　仁獸　飛梁に遊ぶ
華館寄流波　豁達來風涼　　華館　流波に寄り　豁達として風の涼しきを来たらしむ
生平未始聞　歌之安能詳　　生平　未だ始めより聞かず　之を歌うも安くんぞ能く詳らかにせん
投翰長歎息　綺麗不可忘　　翰を投じて長く歎息するも　綺麗　忘るべからず

前の二首と共通する景物である月・樹木・水・鳥などにまず注目すべきである。また、最後における自らの感想を述べる部分に、劉楨はこの景色に対して「生平未始聞、歌之安能詳」、つまり生まれて初めて見たこの景色を、如何にうたってもうたい尽くせないという賛嘆の声を出している。この二句もこのグループの詩の創作時期を推定するもう一つの手がかりになる。もし彼がすでに西園の遊覧に慣れていたら、このような賛嘆は不自然であろう。ゆえに、これらの詩は劉楨を含む建安文人たちが西園での宴遊活動を始めたばかりの頃に作られたと推測する。逆に言えば、最初の頃の遊覧であるからこそ、西園の景色をこれほど詳しく描写する理由があるのかもしれない。

曹植詩と劉楨詩それぞれの冒頭の二句を合わせて見れば、当日の夜の遊覧の前にはまだ昼間の宴会があったということが分かる。しかし、その宴会の場面を描写している詩は現存する建安公宴詩の中には見られないようである。ただ、その宴会の場で作られたような作品があり、即ち應瑒の「侍五官中郎將建章臺集詩」である。

朝雁鳴雲中　音響一何哀　　朝雁　雲中に鳴く　音響　一に何ぞ哀しき

問子遊何鄉　戢翼正徘徊　　問う　子　何れの鄉にか遊ばんとして　翼を戢(おさ)めて正に徘徊すると
言我寒門來　將就衡陽棲　　言う　我　寒門より来たり　将に衡陽に就きて棲まんとすと
往春翔北土　今冬客南淮　　往春　北土に翔り　今冬　南淮に客たり
遠行蒙霜雪　毛羽日摧頹　　遠行して霜雪を蒙り　毛羽　日びに摧頽す
常恐傷肌骨　身隕沈黃泥　　常に恐る　肌骨を傷め　身は隕ちて黄泥に沈まんことを
簡珠墮沙石　何能中自諧　　簡珠　沙石に墮つ　何ぞ能く中に自ら諧(かな)わん
欲因雲雨會　濯羽陵高梯　　雲雨の会に因りて　羽を濯(すす)ぎて高梯を陵(しの)がんと欲す
良遇不可値　伸眉路何階　　良遇　値(あ)うべからず　眉を伸ばすに路は何くにか階(と)らん
公子敬愛客　樂飲不知疲　　公子は客を敬愛し　楽しみ飲みて疲るるを知らず
和顏既以暢　乃肯顧細微　　和顔　既に以て暢(の)び　乃ち肯て細微を顧みる
贈詩見存慰　小子非所宜　　詩を贈りて存慰せらるるも　小子の宜しき所に非ず
爲且極歡情　不醉其無歸　　為に且(しばら)く歓情を極む　酔わざれば其れ帰ること無からん
凡百敬爾位　以副飢渴懷　　凡百　爾(そ)の位(くらい)を敬(つつし)み　以て飢渴の懐(おも)い副(そ)わん

この詩も『文選』の「公讌」類に収録されているが、前半の十八句と後半の十句に分けて、内容はそれぞれ自らの生涯への感傷と宴会の主催者である曹丕への感謝である。宴会の場面、例えば飲食や音楽に対する描写はほとんどないので、建安公宴詩の一般的モデルに従わない独特な存在である。ただし、詩の後半にある「公子敬愛客、樂飲不知疲」二句は、曹植「公讌詩」の「公子敬愛客、終宴不知疲」とはごく類似している表現であり、二者の間の関連性が感じられる。また、「贈詩」という表現から見れば、今に伝わっていないことも考えられるが、その宴会の場で曹丕も詩を作ったことが分かる。

題名にいう「建章臺」については不詳であるが、「建章」というのは、もともとは前漢武帝の時、長安に建てられた宮殿の名であり、ここでは恐らく鄴都にある台を指している。兪紹初氏は、即ち銅雀台であると推測している。[19] もしそうであれば、このグループの詩に反映された宴遊も銅雀台ができた後、即ち建安十七年[20]（二一二）以降のことである。また、趙幼文氏が推測した曹植「公讌詩」（および曹丕「芙蓉池作」）の創作時期と、建安文人たちの早期の宴遊という条件を考えれば、以上四首の詩は建安十七年秋の西園における宴遊を表現する作品であると推測する。

四、冬の宴

冬の宴会を描写している公宴詩には、曹丕の「於譙作詩」と劉楨の「贈五官中郎將四首」其一・其四があり、みな同じ宴会の場面を表現していると考えられる。また應瑒の「公讌詩」もあり、これも類似した表現や内容によって前の三首と同じ宴会を描写している作品であると推測する。

曹丕の「於譙作詩」と劉楨の「贈五官中郎將四首」其一は、先行研究に述べられている通り、同じく建安十四年（二〇九）冬に曹丕が譙において主催した宴会を描写している。[21] 建安十四年十二月、曹操は駐在先の合肥から軍を引き、故郷の譙に帰った。その時、二十三歳の曹丕もこの度の行軍に参加しており、[22] 十八歳の曹植も参加した可能性がある。[23] まずは曹丕の「於譙作詩」から見てみよう。

清夜延貴客　明燭發高光　清夜に貴客を延(まね)き　明燭　高光を発す
豐膳漫星陳　旨酒盈玉觴　豊膳　漫(みだ)りに星陳し　旨酒　玉觴に盈つ
絃歌奏新曲　遊響拂丹梁　絃歌　新曲を奏し　遊響　丹梁を払う
餘音赴迅節　慷慨時激揚　餘音　迅節に赴き　慷慨として時に激揚す

獻酬紛交錯　雅舞何鏘鏘　獻酬　紛として交錯し　雅舞　何ぞ鏘鏘たり
羅纓從風飛　長劍自低昂　羅纓　風に從いて飛び　長劍　自から低昂す
穆穆衆君子　和合同樂康　穆穆たる衆君子　和合して同に樂康す

この詩は現存する曹丕の公宴詩の中で最も早い作品であり、若い曹丕が初めて自ら主催した宴会を反映している可能性もある。それにもかかわらず、この詩は宴会の背景と場面の描写、そして賓客への称揚という三つの部分から構成され、建安公宴詩の一般的モデルはすでにこの詩に整っている。季節と場所の表現が見られないとしても、劉楨の「贈五官中郎將四首」其一と対照すれば同じ場面であることが分かる。

昔我從元后　整駕至南鄉　昔　我　元后に從い　駕を整えて南鄉に至る
過彼豐沛都　與君共翺翔　彼の豊沛の都に過ぎり　君と共に翺翔す
四節相推斥　季冬風且涼　四節　相い推斥し　季冬　風ふき且つ涼たし
衆賓會廣坐　明鐙熺炎光　衆賓　広坐に会し　明鐙　炎光を熺かす
清歌製妙聲　萬舞在中堂　清歌　妙声を製し　万舞　中堂に在り
金罍含甘醴　羽觴行無方　金罍　甘醴を含み　羽觴　行りて方無し
長夜忘歸來　聊且爲太康　長夜に帰来を忘れ　聊且か太康を為す
四牡向路馳　歡悅誠未央　四牡　路に向かいて馳するに　歡悅　誠に未だ央きず

劉楨のこの連作は『文選』贈答に収録されているが、其一と其四は公宴の内容を表現している。曹丕の詩は宴会の場で作られた作品であるのに対し、劉楨のこの詩は数年後の追憶である。最初の四句は、曹操の南征に参加して、譙

に過って曹丕と交遊した経緯を述べている。「豐沛都」の表現は、曹氏の故郷である譙を漢の高祖の故郷である豊沛に喩えて詠っている。「四節相推斥、季冬風且涼」二句は季節を表し、「季冬」とは十二月をいう。「衆賓會廣坐」からの六句は宴会の場面を描写している。夜の室内という環境が曹丕の詩と共通しており、更に楽曲や歌声と比べれば、建安公宴詩にそれほど多く描写されていない舞踊の場面にも、二首とも触れている。

そして、以下の連作の其四も、上述と同時期の宴会を描写している可能性がある。

涼風吹沙礫　霜氣何皚皚　涼風　沙礫を吹き　霜気　何ぞ皚皚たり
明月照緹幕　華燈散炎輝　明月　緹幕を照らし　華灯　炎輝を散ず
賦詩連篇章　極夜不知歸　詩を賦して篇章を連ね　夜を極めて帰るを知らず
君侯多壯思　文雅縱横飛　君侯は壮思多く　文雅　縱横に飛ぶ
小臣信頑鹵　僶俛安能追　小臣は信(まこと)に頑鹵にして　僶俛するも安くんぞ能く追わんや

最初の二句は季節を表している。特に「霜氣何皚皚」と類似した用例を探せば、西晋の夏侯湛の「寒苦謠」に「惟立冬之初夜……霜皚皚以被庭」という表現があり、明らかに冬の季節の特徴である。従って、この詩も冬を描写していることが分かる。次の二句も前の二首と同じように夜の室内の表現である。問題になるのは次の二句である。「賦詩連篇章、極夜不知歸」の主語は誰であろうか、この問題は詩の理解に関しては重要である。現行の注釈本では、よくこの二句の主語を曹丕として理解している。さらに詩全体の意味を、劉楨は曹丕が出征先のテントにおいて夜まで文学創作に夢中する様子を想像して詠っている、というように解釈している。しかし、「歸」の一字には主客の概念が含まれている。もし曹丕がひとりで自らの住む所で詩文を作るという場面だとすれば、「歸」の意味は成立しない。ゆえに、この二句が描いているのは、また曹丕が主催した宴会においてみなで詩文を作り、賓客たちが夜明けまで帰

ることを忘れるという場面であろう。「詩を賦す」のは曹丕も含めているが、「帰るを知らず」は劉楨らの賓客であると理解したほうが相応しい。また、のちに連作とされているが、必ずすべて同じ時期の作品であるわけではない。この詩は恐らく宴会を追憶する其一と違い、宴会その場で作られた作品のように思われる。

最後に應瑒の「公讌詩」を前の三首と比べて見てみよう。

巍巍主人德　佳會被四方　巍巍たる主人の徳　佳会　四方を被る
開館延群士　置酒于斯堂　館を開きて群士を延き　酒を斯の堂に於いて置く
辨論釋鬱結　援筆興文章　論を弁じて鬱結を釈し　筆を援きて文章を興す
穆穆衆君子　好合同歡康　穆穆たる衆君子　好合して同に歓康す
促坐褰重帷　傳滿騰羽觴　坐を促して重帷を褰ぎ　満つるを伝いて羽觴を騰う

この詩に見える前の三首と関わりがあるようなところは、まず「穆穆衆君子、好合同歡康」二句と曹丕「於譙作詩」の「穆穆衆君子、和合同樂康」とはごく類似しているという点である。また季節を表す語は見られないが、「辨論釋鬱結、援筆興文章」二句の表現は劉楨詩の其四にある「賦詩連篇章」という表現によく対応している。この詩文を作る場面も、建安公宴詩に普遍的に描かれている場面ではないのである。さらに、第二句の「佳會被四方」というのは、この度の宴会が都ではなく地方で開催されたようにとれる。また第三句の「開館延群士」の「館」という語からは臨時の屋敷を用意して文士たちを招くという意味がとれる。ゆえに、この詩も前の三首と同じ宴会を表現している可能性があると推測する。

おわりに

建安の公宴詩は集団創作の産物ではあるが、すべて同時期の作品とは限らない。現存する建安公宴詩は、たいてい時期や場所の異なる四回の宴会に関して詠われたと考えられる。時間順に言えば、

・第一回は、建安十四年十二月の譙における宴会である。関連作品は曹丕「於譙作詩」・劉楨「贈五官中郎將四首」其一と其四・應瑒「公讌詩」の四首である。

・第二回は、建安十七年秋の銅雀台における宴会およびそれと密接している西園における遊覧である。関連作品は曹丕「芙蓉池作」・曹植「公讌詩」・劉楨・「公讌詩」・應瑒「侍五官中郎將建章臺集詩」の四首である。

・第三回は、建安二十一年元日の孟津における宴会である。関連作品は曹丕の「孟津詩」である。

・第四回は、建安二十一年夏の鄴宮における宴会である。関連作品は曹丕「夏日詩」・曹植「侍太子坐詩」・王粲「公讌詩」・陳琳「宴會詩」の四首である。

四回とも主催者は曹丕である。ほかには、この四回の宴会との関わりが不明確な作品もある。例えば阮瑀の「公讌詩」である。

建安十七年、阮瑀が没した。二十二年正月に王粲がなくなり、その冬には陳琳・劉楨・應瑒・徐幹がほぼ同時に世を去った。振り返れば、建安二十一年、あの涼しい風が吹いた夏の日は、建安文学における最後の盛宴になったのかもしれない。しかし、建安の詩人たちが残した公宴詩の作品とこの詩のジャンルは、六朝から唐にかけて更に多くの作品を生み出し、その生命力は絶えず続いている。

注

（1）「讌」は「宴」に通じるため、テキストによっては「公讌」に作るものもあるが、本稿では常用漢字の「宴」を用いる。

ただし、原文を引用する時は原文に従う。また、本稿に引用された詩は、『文選』所収のものは『文選』のテキストに従い、他はすべて逯欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局、一九八三年）のテキストに従う。

（2）『文選』巻二〇曹植「公讌詩」呂延濟注：「公讌者、臣下在公家侍讌也。」

（3）兪紹初輯校『建安七子集（修訂本）』（中華書局、二〇一六年）の「附錄四：建安七子年譜」（四六九頁）によれば、徐幹も当時の宴遊に参加したが、詩は亡佚したとされている。

（4）兪前掲書（四三六頁）の考証によれば、阮瑀が曹操の配下になったのは建安三年（一九八）の頃である。

（5）『魏志』武帝紀：「二十年……三月、公西征張魯……二十一年春二月、公還鄴。」

（6）『魏志』鍾繇傳裴松之注：「『魏略』曰：『後太祖征漢中、太子在孟津。』」

（7）『魏志』武帝紀：「二十年……十一月、魯自巴中將其餘衆降。」

（8）逯前掲書、四五〇頁：「逯案、詩爲夏日作、白日曜青春句、御覽引春作天者是。」趙幼文『曹植集校注（修訂版）』（中華書局、二〇一六年）二六五頁注一：「案此詩天字不誤。」

（9）中古音の韻部は『広韻』による。上古音の韻部は郭錫良『漢字古音手冊』（北京大学出版社、一九八六年）による。

（10）川合康三「うたげのうた」（『中国文学報』第五三冊、一九九六年）。

（11）趙前掲書、二六五頁注九。原文は以下の通り：

機巧忽若神、曹丕「典論自序」：「余於他戲弄之事少所喜、唯彈棊略盡其妙（據『世説』巧藝注改）、少爲之賦。昔京師先工有二焉（原作馬、據『世説』改）、谷鄉侯東方安世張公子、（予）常恨不得與彼數子者對。」『博物志』：「帝善彈棊、能用手巾角（揮之、黃門跪受。）」（據『書鈔』一三六引補）

（12）『文選』巻二〇王粲「公讌詩」李善注：「主人、謂太祖也。……此詩侍曹操讌。」

（13）呉雲主編　張連科校注『建安七子集校注（修訂版）』（天津古籍出版社、二〇〇五年）一二八頁注三、また夏傳才主編杜志勇校注『孔融陳琳合集校注』（『建安文学全書』、河北教育出版社、二〇一三年）一〇七頁注二もこの解釈を採用している。

(14) 『魏志』武帝紀：「十八年……五月丙申、天子使御史大夫郗慮持節策命公爲魏公。」

(15) 『魏志』武帝紀：「二十一年……夏五月、天子進公爵爲魏王。」

(16) 例えば、趙前掲書と徐公持『曹植年譜考証』（社会科学文献出版社、二〇一六年）である。趙書二二三頁と徐書一九九頁には、それぞれ「大暑賦」の創作時期について詳しく論述されている。

(17) 比較的に早いものは民国の黄節『曹子建詩注』（中華書局、二〇〇八年）であり、その原文は以下の通り（八頁注一四）：

此詩蓋和魏文帝「芙蓉池作」。「清夜」兩句、即和「乘輦夜行遊、逍遙步西園」。「明月」兩句、即和「丹霞夾明月、華星出雲間」。「好鳥」「神飆」、即和「驚風扶輪轂、飛鳥翔我前」。「飄飄」兩句、即和「遨遊快心意、保己終百年」。

(18) 趙前掲書は曹植の作品を時間順に並べているが、「公宴」と題するこの詩を、創作時期が建安十七年と確定できる「登臺賦」と「光禄大夫荀侯誄」二篇の作品の間に置いている。また詩の注釈の後には従来の建安十六年説に対して以下のように述べている（七四頁）：

案丁氏『年譜』（筆者注：即ち丁晏『曹集銓評』附「魏陳思王年譜」）列此詩於建安十六年。據『魏志』武帝紀、建安十六年秋七月、曹操西征馬超、植從行、見本卷「離思賦」序、似植不得有此詩也、丁譜或未確。

(19) 兪前掲書（四六七頁）は以下のように述べている：

題所云建章臺、疑即銅雀臺。『藝文類聚』卷六二載繁欽「建章鳳闕賦」、其敘建章鳳闕之地理・形制與左思「魏都賦」説銅雀臺相符、豈建章臺或爲銅雀臺之初名邪？

(20) 『魏志』武帝紀：「二十五年……冬、作銅雀臺。」陳思王伝：「時鄴銅爵臺新成、太祖悉將諸子登臺、使各賦。」曹丕「登臺賦」序：「建安十七年春、上遊西園、登銅爵臺、命余兄弟竝作。」「銅爵臺」は即ち銅雀台である。従って銅雀台の建造は建安十五年冬から始まり、建安十七年春の頃に完成された。これについては、趙前掲書（七〇頁）や徐前掲書（一四一頁）に詳しく論じられている。

(21) これについては、例えば俞前掲書（四六一頁）に論述がある。

(22) 『魏志』武帝紀：「十四年春三月、軍至譙……秋七月、自渦入淮、出肥水、軍合肥……十二月、軍還譙。」曹丕「浮淮賦」序：「建安十四年、王師自譙東征……時余従行。」

(23) 徐前掲書（一〇四頁）にはこれについて詳しく論じられている。